

恋愛のイメージと好意理由に及ぼす異性関係と性別の影響¹⁾

金政祐司・谷口淳一・石盛真徳(大阪大学大学院人間科学研究科)

本研究は、178名の回答者に“恋愛とは何か”、及び“最も身近な異性への好意の理由”を自由記述の形で回答してもらい、それらがどのようなカテゴリーに分類され、また、それら分類カテゴリーが回答者の性別や異性関係にどういった影響を受けるのかということについての検討を目的に行われた。カテゴリー分類の結果、“恋愛とは何か”の記述は15カテゴリーに、“最も身近な異性への好意の理由”については9カテゴリーにそれぞれ分類された。“恋愛とは何か”の分類カテゴリーにおいて回答者の性差、異性関係による差の検証とその関係を考慮した上での性差の分析を行った結果、相互的な関係においては、男性は女性よりも恋愛を複雑であるとする傾向、女性は安定した関係においては男性よりも恋愛をポジティブに捉えていることなどが見出された。“最も身近な異性への好意の理由”の質問では異性関係によらず女性は相手の内面的な望ましさを挙げており、また、男性は相互的ではない関係において外見的魅力をより多く挙げる傾向があった。これらの結果を異性関係、性別における恋愛の概念や好意過程の違いという点から議論を行った。

キーワード: 恋愛、好意、対人魅力、恋愛関係、性別

問題

「恋愛」は今昔、いつの世においても人々の関心の中心となってきた重要なテーマの一つである。古くはギリシャ神話においても、人々は自らの姿を神々のそれに重ね、様々な恋愛の在り方をそこに語ってきた。プラトンが、その著書「シンポジオン」において、全一なる自己への回帰、同一化に愛の形を求めたのは広く知られた話である。現代においても、やはり、青年期の男女にとって恋愛関係は最も主要な関心事のひとつであり(松井・戸田 1984)、実際、彼らが恋愛や愛というものをどのように捉えているのか、ということの研究することは重要であると思われる。

社会心理学において恋愛研究は従来、対人魅力と絡めて研究されてきた。初対面の他者に対して人がどのように好意を抱くのか、という点について多数の研究が報告されており、その中で様々な要因がその規定性を持つことが示されてきた。それら規定因の代表的なものを挙げるだけでも、自己開示・類似性・近接性・身体的魅力・返報性・他者評価・感情状態・環境条件(奥田, 1997)、などがあり、その各々についても膨大な量の資料が提出されるに至っている。しかしながら、それら規定因を実際に個人が他者に魅力を感じた理由としてどの程度言及するのか、すなわち、実生活の上において他人に好意を抱くに至った理由としてそれらの規定因が本人にどの程度意識されているのかについての研究は前者と比較して以外に少ないように思われる。Aron, Dutton, Aron, & Iverson(1989)は、恋に落ちた理由、並びに友達になった理由の自由記述回答を分析し、その結果、恋に落ちた理由としては、好意の返報性、相手の望ましい特徴、並びに態度や性格の類似性、近接性などが多く挙げられ、それと比較して友達になった理由では、態度や性格の類似性、及び近接性の挙げられる割合が高くなる傾向があることを示した。類似した研究は、Sprecher(1998)によってもなされ、恋愛関係、同性の友人関係、異性の友人関係といった関係性によって好意を抱く理由の重要度が異なってくるという結果を得ている。また、淵上と楠見(1987)はブレイン・ストーミング法で恋愛相手と交際を始めた理由を尋ね、そこに様々な要因が存在することを示している。これらのことから恋愛を考えるにあたって、まず、どのような相手に対して、どういった側面に魅力を抱くかということを知ることは非常に重要なポイントである。本研究の目的の一つは、まず、現代の青年が異性のどのようなところに好意を抱くのか、その

好意の理由を探ることである。

恋愛や愛情をその対象とした研究は多岐にわたっており、研究者の視点によりその内容・構造の捉えられ方は様々である。その先駆的なものには Maslow(1962)の D-love(欠乏や渴望からくる愛)と B-love(愛する他者に自らを捧げることのできる者に開かれる成長の愛)の分類が挙げられ、その後、対人魅力の質的な差に注目し、「恋愛」と「好意」を異なるものとして捉えた Rubin(1970)の研究、さらには、恋愛を5つの形(ロマンティック依存性・親密さの伝達・身体的覚醒・尊敬・ロマンティック一体感)に分類した Critelli, Myers, & Loos(1986)の研究や、「親密性」、「情熱」、「コミットメント」という3要素の組み合わせから恋愛が8つの形で表されるとする Sternberg(1986)の「恋愛の三角理論」などが提唱されてきた。

そのなかでも、恋愛の分類として広く認知されるに至った Lee の恋愛類型(1977)においては、Hendrick & Hendrick(1986)によって各類型を測定する質問項目尺度「Love Attitude Scale」が作成されるや、その信頼性や妥当性が検討されると共に、様々な角度からの研究が行われている。恋愛類型における性差を見た研究(Hendrick & Hendrick, 1986; Hendrick & Hendrick, 1995; Hendrick, Hendrick & Adler, 1988)、パーソナリティとの関連を見た研究(Arnold & Thompson, 1996; Hendrick & Hendrick, 1986; Woll, 1989)、関係への満足度との関連を調べた研究(Davis & Latty-Mann, 1987; Hendrick & Hendrick, 1988)、また、マッチング仮説を基に恋愛スタイルと好みの異性との関連を検討した研究(Jennifer & Thomas, 1997)など、そういった研究の枚挙にはいとまない。さらに、日本においても、松井(1990)が Lee の恋愛類型論に基づいて、恋愛意識尺度(LETS-2)を作成しており、また、その得点に性差(松井, 1990; 松井, 1993a)、及び関係性や関係進行段階における差(松井, 1993a; 和田, 1994)があることも見出されている。

しかしながら、上述してきた様々な愛の分類は理論に添った形で尺度構成がなされ、また、特定の相手に対する感情や態度を回答させているため、実際に人が恋愛をどのように捉えているのかといった恋愛観や恋愛のイメージについてはあまりふれられていないように思われる。Fehr & Russell(1991)は、愛のプロトタイプ研究において「愛の概念は、そのありのままを理解すべきであり、日常的な愛の概念は記述的に分析をすべきである。」と述べている。恋愛についても、日々、人々がそれをどのように考え、どのように捉えているのか、それをありのまま理解することは重要なことであろう。

以上の点をふまえ、本研究の目的としては、まず、現代の青年が実際に恋愛や愛というものをどのように考えているのか、また、どう捉えているのかについて自由記述による回答を求め、その概要を把握すること、並びに上述したように個人が異性に対して好意を抱く時どのようなところに魅力を感じているのか、その好意の理由として挙げられるものについても同様に自由記述での回答を求め、その双方の回答について分類・カテゴリー化を行うことである。加えて、それら「恋愛のイメージ」と「好意理由」が個人の恋愛状況や属性、すなわち特定の異性との関係や性別に何らかの影響を受けるであろう、ということについても検証する。例えば、分類されたもののうち、あるものについては関係性の影響を強く受け、別のものは性別の影響を強く受けているというようなことが予想される。

方法

調査対象と方法

大阪府下の国立大学と看護学校で恋愛関係についての質問紙を配布し、共に心理学講義時間内に一斉に調査を行った。国立大生 150 名、看護学校生 39 名の回答を得たが、青年を対象とする調査目的にそぐわないと思われる年齢 30 歳以上の回答者を除外した 178 名(男性, 117 名, 女性, 61 名, 平均: 19.88 歳, 年齢範囲: 18 歳 ~ 29 歳)を分析対象者として扱うこととした。

質問項目は、回答者のデモグラフィックな特徴をみる項目(回答者の生年月日、性別、所属)と回答者にとって「恋人、好きな人、又は家族以外で最も親しい人」について尋ねた項目(その人の年齢、回答者との関係、知り合ってから年月)、その相手の印象、相手と一緒にいる時の感情、その時の自分の印象を尋ねる項目に続けて、「今、思い浮かべている人を好きになった理由」と「あなたにとって恋愛(愛)とは何ですか」という質問に対して自由記述で回答してもらった(ただし、本研究では、相手の印象、相手と一緒にいる時の感情、その時の自分の印象を尋ねる項目については報告をしない)。なお、それぞれの自由記述に対して無回答者がいるため、以下の分析では若干、対象者数に変動がある。

結果

対象異性についての項目

回答者にとって恋人、好きな人、又は家族以外で最も親しい人に関して尋ねた項目の結果は、対象異性の年齢(平均:20.43歳、範囲:18歳~40歳)、対象異性との関係(恋人:46人、ボーイフレンド・ガールフレンド(BF&GF):22人、片思い:36人、親友:14人、友達:55人、その他:5人)、知り合ってから年月(平均:2年8ヶ月、範囲:1ヶ月~16年)であった。

自由記述の内容分析

自由記述の分析対象者は、「あなたにとって恋愛(愛)とは何ですか」の質問では、総回答者178名から20名の無回答者を除いた158名(男性103名、女性55名)、「今、思い浮かべている人を好きになった理由」の質問では、13名の無回答者と、「好きではない」と回答した9名を除いた156名(男子103名、女子53名)である。(なお、以下の記述内容のカテゴリー化、及びカテゴリーの分類に関しては飛田(1990)を参考とした。)

まず始めに、研究協力者と共に「恋愛(愛)とは何ですか」の158名の記述と、「好きになった理由」156名の記述を分析の基本単位に分割する作業を行った。これは、両回答において、1つの記述に2つ以上の理由や意味が言及されていることを避けるためであり、基本的に句点での分割を試みている。しかし、例えば「生きていく上で最も大切なこと、常に私のことを支えてくれるもの」というように間に句点が入っていてもおかしくないようなものや、また、「おもしろいし、やさしいから」というような意味合いの違うものが1つの記述に含まれていると判断した場合には研究協力者と協議の末、記述の分割を行った。その結果、「恋愛とは何ですか」(以後、恋愛のイメージ)に関しては247、「好きになった理由」(以後、好意理由)では259に分割されたため、これらを以後の分析の基本単位として扱うこととする。

それぞれの質問に対する総回答者の言及数の平均、及び範囲は「恋愛のイメージ」で平均1.56:範囲1~5、「好意理由」では平均1.65:範囲1~4であった。また、男女別では「恋愛のイメージ」の言及数の平均は男性1.39、女性1.87、「好意理由」では男性1.42、女性2.11で、両質問ともに言及数で性別に有意な差が見られ、($t=5.10$, $df=154$, $p<.001$; $t=3.30$, $df=156$, $p<.001$)女性の方の言及数が有意に高いことが示された。しかし、回答者の対象異性との関係(恋人、BF&GF、片思い、友達、その他)を独立変数とし、言及数を従属変数とした一要因分散分析の結果には有意な主効果は見られなかった。

次に、「恋愛のイメージ」については247、「好意理由」については259の基本単位を全て包括することを目的としたカテゴリー・システムの作成を試みた。研究目的を知る研究者2名がそれぞれ独立に基本単位を分類していった結果、両質問において、ほぼ同数、同様なカテゴリーが得られたため、両者の協議によってカテゴリー間の調節を行い、カテゴリー名、及び内容の決定をした。最終的に「恋愛の

表1 「恋愛のイメージ」の分類カテゴリー表

カテゴリー	カテゴリー内容	全体 (n=158)	男性 (n=103)	女性 (n=55)
付加価値	恋愛を不可欠でないもの、人生の付加価値ではないとしているもの	5.1	1.9	10.9 *
必要 大切	恋愛を大切なもの、不可欠なものと言及しているもの	13.9	11.7	18.2
成長	恋愛を人間を向上させるもの、成長の場であると捉えているもの	13.9	11.7	18.2
複雑 苦悩	恋愛を複雑で、時には苦痛を伴うものだとしているもの	15.2	15.5	14.6
衝動的	恋愛を衝動的なもの、感情の高ぶりであると捉えているもの	7.6	5.8	10.9
一緒にいるもたい	恋愛とは、相手と一緒にいること、一緒にいたいと思うことであるとしているもの	3.8	3.9	3.6
幻想 思い込み	恋愛を思い込み、勘違いであるといった一人よがりなものであるとするもの	12.0	15.5	5.5
あこがれ	恋愛を素敵なもの、してみたいものといったあこがれとして捉えているもの	6.3	4.9	9.1
謎 あいまい	恋愛をあいまい、謎、わからない、といった不明なものであるとするもの	11.4	12.6	9.1
現実的	恋愛を妥協や、お金のかかるもの、SEXといった現実的な捉え方をしているもの	7.6	8.7	5.5
楽しい	恋愛を楽しむものであるとしているもの	8.9	9.7	7.3
幸せ 安らぎ	恋愛を安らぎを与えてくれる、幸せを感じさせてくれるものであるとしているもの	10.1	9.7	10.9
活力&パワー 支え	恋愛は生活の活力や支えとなるもの、パワーの与えてくれるものだとするもの	16.5	11.7	25.5 *
信頼 やさしさ	恋愛とは信頼感や、やさしさといった相互的なものであるとするもの	15.2	11.7	21.8
相手を思うこと	恋愛とはひとえに相手を思うこと、好きになることであるとするもの	8.2	3.9	16.4 *

数値は全て%で表示 * p<.05

表2 「好意理由」の分類カテゴリー表

カテゴリー	カテゴリー内容	全体 (n=156)	男性 (n=103)	女性 (n=53)
類似性 合致性	自分と似ているから、趣味が合うからといった類似性や合致性を好意理由として挙げているもの	26.3	26.2	26.4
気楽さ 話しやすさ	話しやすさや一緒にいる時の気楽さなどを好意理由として挙げているもの	30.8	29.1	34.0
状況 返報	状況的な要因や相手からの好意に対する返報を好意理由としているもの	11.5	9.7	15.1
やさしさ 思いやり	好意理由をやさしさや思いやりに求めているもの	23.7	14.6	41.5 **
人柄の良さ(やさしさ以外)	信頼できるから、真面目そう、誠実そうだったからといったやさしさ以外の人柄の良さを好意理由として挙げているもの	25.6	9.7	56.6 **
楽しさ おもしろさ	楽しいから、おもしろいだからといったものに好意理由を求めているもの	7.1	5.8	9.4
運命的 不明	好意理由に運命的なものやフィーリング、理由ないといったものを挙げているもの	11.5	13.6	7.5
外見的魅力	好意理由にかわいかった、綺麗だった、カッコ良かったといった外見的魅力を挙げているもの	21.8	25.2	15.1
非類似性	自分と似ていない、自分とは違うといった非類似性を好意理由としているもの	7.1	7.8	5.7

数値は全て%で表示 ** p<.01

イメージ」では 15 カテゴリーが「好意理由」では 9 カテゴリーが設定された。カテゴリー名とその内容を表1、及び表2に示す。

分析の第三段階として、上述のカテゴリーに各々の基本単位がどのように分類されるのかについての作業を行った。手続きとしては、研究目的を知る研究者1名と研究目的を知らない心理学専攻者4名の計5名の判定者(男性3名、女性2名)がそれぞれ別々に「恋愛のイメージ」では247の総基本単位を設定された15カテゴリーに、「好意理由」では259の総基本単位を9カテゴリーに分類する作業を行った。最終的に各基本単位がどのカテゴリーに分類されるかについては5名のうちで分類した人数の多いカテゴリーをその最終カテゴリーとして採用している。また、「恋愛のイメージ」、「好意理由」のそれぞれで1つの基本単位の分類が5人の判定者間で全く異なっていたため、その基本単位を分析から除外した。分類の結果、5名の判定者間の相互の一致率の範囲は「恋愛のイメージ」で.71~.81、「好意理由」については.84~.92であった。「恋愛のイメージ」における判定者間の一致率が多少低めであるとは考えられるが、最終的なカテゴリーは上記のようにそれぞれ別々に分類を行った5名における多数決制で決定しているにもかかわらず、本研究の目的を知る研究者のカテゴリー分類とその最終的なカテゴリー分類との一致率が.92と非常に高いものであることは、このカテゴリー分類の信頼性の高さを示すものである。これらのことから、両カテゴリー・システム、及び両カテゴリーへの分類が十分に信頼に足るものであったと考えることができるだろう。

「恋愛のイメージ」、「好意理由」、両質問のカテゴリー分類の結果として、総被験者数に対する各カテゴリーの使用比率

及び男女別の使用比率を表1、表2の右方に示した。また、各カテゴリーの使用比率が回答者の性別によって異なるかどうかについて検討するために²検定(イエーツ補正)を行った結果、「恋愛のイメージ」においては「付加価値」($\chi^2=4.23, p<.05$)、「活力&パワー・支え」($\chi^2=4.02, p<.05$)、「相手を思うこと」($\chi^2=5.84, p<.05$)の3カテゴリーで女性の方の使用比率が有意に高く、「好意理由」においても「やさしさ・思いやり」($\chi^2=12.59, p<.01$)、「人柄の良さ(やさしさ以外)」($\chi^2=37.94, p<.01$)の2カテゴリーで女性の方の使用比率が有意に高いことが示された。使用比率の有意に高いものが女性に偏っているのは、一つには元々の言及数が男性よりも女性の方が多いことに由来するであろうが、にもかかわらず、女性が男性よりも恋愛に対して上述のような相反するとも思えるイメージを持っていること、及び「好意理由」においては内面的な望ましさをより言及していることなどはこれらのことから見てとれるであろう。

分類カテゴリーの異性関係による差、及びその性別差の検証

次に「恋愛のイメージ」、及び「好意理由」の両質問で各分類カテゴリーの異性関係による差の検証を行うため、回答者の対象異性との関係に応じて分割を行った。具体的には、対象異性との関係を「恋人」、「BF&GF」とした回答者は、本人と相手の双方が互いに恋愛感情を持つ関係であることから、それらを恋愛における「相互的」関係群、反対に、異性との関係を「片思い」、「親友」、「友達」とした回答者は、未だ相互に恋愛感情を持つ関係に至っていないであろうことから、それらを恋愛における「個人的」関係群とした。また、異性との関係を「恋人」、「友達」、「親友」とした回答者は、関係として比較的落ち着いたものであろうことより、それらを「安定的」関係群、反対に、異性との関係を「BF&GF」、「片思い」とした回答者については、変動性を伴った比較的不安定な関係であろうことから、それらを「変動的」関係群とした。また、対象異性との関係を「その他」としていた5名の回答者については分析の対象から除外した。以後、これらの「相互的」、「個人的」関係群、及び「安定的」、「変動的」関係群を分析の対象として扱うこととする。

まず、「恋愛のイメージ」の各分類カテゴリーにおいて、「相互的」、「個人的」関係の間に差がないかを検討するために²検定(イエーツ補正)を行った。また、「安定的」、「変動的」関係間においても、その差を検討するために同様の分析を行った。その結果、表3に示したように、「相互的」関係群においては「幸せ・安らぎ」($\chi^2=2.84, p<.10$)、「活力&パワー・支え」($\chi^2=7.27, p<.01$)の使用比率が「個人的」関係群よりも有意(傾向的)に高く、反対に「個人的」関係群では「あこがれ」($\chi^2=5.43, p<.05$)の使用比率が有意に高いことが示された。また、「安定的」関係群では、「必要・大切」($\chi^2=3.25, p<.10$)、「信頼・やさしさ」($\chi^2=4.25, p<.05$)の両カテゴリーにおいて、その使用比率が「変動的」関係群よりも有意(傾向的)に高かった。

また、上記のように分類カテゴリーで関係性による差が生じているのであれば、性差についても対象異性との関係を考慮に入れた上で検討すべきであろうという視点から、「相互的」、「個人的」関係群、及び「安定的」、「変動的」関係群のそれぞれで男女間に差があるかについての²検定(イエーツ補正)を行った。その結果を表4に示す。まず、「相互的」関係群では「成長」($\chi^2=4.58, p<.05$)に有意差「複雑・苦悩」($\chi^2=3.26, p<.10$)に傾向差が見られ、「成長」は女性で使用頻度が高く、「複雑・苦悩」は男性での使用頻度が高い。「個人的」関係群においては女性の「付加価値」($\chi^2=6.92, p<.01$)の使用頻度が男性と比べ有意に高かった。更に「安定的」関係群では、「活力&パワー・支え」($\chi^2=5.47, p<.01$)、「信頼・やさしさ」($\chi^2=4.11, p<.05$)、「相手を思うこと」($\chi^2=3.42, p<.10$)の3カテゴリー全てにおいて女性の方の使用頻度が有意(傾向的)に高いという結果が得られた。しかし、「変動的」関係群においては男女の間に有意な差は見られなかった。また、男性、女性のそれぞれで関係間に差が見

表3 恋愛イメージ・カテゴリーの関係別使用比率

恋愛カテゴリー	相互的關係		個人的關係		安定的關係		變動的關係	
	恋人・BF & GF (n=61)		片思い・親友・友達 (n=92)		恋人・親友・友達 (n=101)		BF & GF・片思い (n=52)	
付加価値	3.3		6.5		5.9		3.8	
必要・大切	14.8		13.0		17.8 +		5.8	
成長	16.4		13.0		12.9		17.3	
複雑・苦悩	14.8		16.3		15.8		15.4	
衝動的	4.9		8.7		5.0		11.5	
一緒にいる・いたい	3.3		4.3		2.0		7.7	
幻想・思い込み	11.5		13.0		11.9		13.5	
あこがれ	0.0		10.9 *		5.0		9.6	
謎・あいまい	6.6		14.1		13.9		5.8	
現実的	9.8		5.4		8.9		3.8	
楽しい	9.8		8.7		9.9		7.7	
幸せ・安らぎ	16.4 +		6.5		9.9		11.5	
活力&パワー・支え	27.9 **		9.8		13.9		23.1	
信頼・やさしさ	18.0		13.0		19.8 *		5.8	
相手を思うこと	4.9		10.9		8.9		7.7	

数値は全て%で表示
+ p<.10; * <.05; ** <.01

表4 恋愛イメージ・カテゴリーの各関係性における男女別使用比率

恋愛カテゴリー	相互的關係		個人的關係		安定的關係		變動的關係	
	恋人・BF&GF		片思い・親友・友達		恋人・親友・友達		BF&GF・片思い	
	男性(n=34)	女性(n=27)	男性(n=66)	女性(n=26)	男性(n=68)	女性(n=34)	男性(n=32)	女性(n=20)
付加価値	2.9	3.7	1.5	19.2 **	2.9	11.8	0.0	10.0
必要・大切	8.8	22.2	13.6	11.5	14.7	23.5	6.3	5.0
成長	5.9	29.6 * A	15.2	7.7 a	10.3	17.6	15.6	20.0
複雑・苦悩	23.5 +	3.7 b	12.1	26.9 B	19.1	8.8	9.4	25.0
衝動的	2.9	7.4	7.6	11.5	2.9	8.8	12.5	10.0
一緒にいる・いたい	2.9	3.7	4.5	3.8	1.5	2.9	9.4	5.0
幻想・思い込み	17.6	3.7	15.2	7.7	16.2	2.9	15.6	10.0
あこがれ	0.0	0.0 c	7.6	19.2 C	5.9	2.9	3.1	20.0
謎・あいまい	5.9	7.4	15.2	11.5	16.2	8.8	3.1	10.0
現実的	11.8	7.4	6.1	3.8	8.8	8.8	6.3	0.0
楽しい	8.8	11.1	10.6	3.8	11.8	5.9	6.3	10.0
幸せ・安らぎ	14.7	18.5	7.6	3.8	8.8	11.8	12.5	10.0
活力&パワー・支え	20.6	37.0	7.6	15.4	7.4 d	26.5 *	21.9 D	25.0
信頼・やさしさ	14.7	22.2	9.1	23.1	13.2	32.4 * E	6.3	5.0 e
相手を思うこと	0.0	11.1	6.1	23.1 *	4.4	17.7 +	3.1	15.0

A-a, B-b, C-c, D-d, E-e間に有意、もしくは傾向差あり 数値は全て%で表示
+ p<.10; * <.05; ** <.01

られるかの検定を行った結果も表4に示している。「相互的」関係群の女性は「個人的」関係群の女性よりも「成長」($\chi^2=2.85, p<.10$)を傾向的に高く使用しており、反対に「個人的」関係群の女性は「複雑・苦悩」、「あこがれ」($\chi^2=3.91, p<.05; \chi^2=3.70, p<.10$)といったカテゴリーを有意(傾向的)に高く使用している。「変動的」関係群の男性は、「安定的」関係群の男性と比べて傾向的に「活力&パワー・支え」($\chi^2=3.08, p<.10$)の使用頻度が高く、逆に女性の場合は、「信頼・やさしさ」($\chi^2=3.98, p<.05$)の使用頻度が「安定的」関係群において有意に高いことが示された。

続いて、同様の手順で「好意理由」の各カテゴリーで、「相互的」、「個人的」関係間、また、「安定的」、「変動的」関係間に差があるかについての検定を行った。表5に示した χ^2 検定(イエーツ補正)の結果をみると、「安定的」と「変動的」との比較では「やさしさ・思いやり」($\chi^2=2.94, p<.10$)、「人柄の良さ(やさしさ以外)」($\chi^2=3.46, p<.10$)で傾向差が見られ、「やさしさ・思いやり」は「変動的」関係群で使用比率が高く、「人柄の良さ(やさしさ以外)」は「安定的」関係群での使用比率が高いことが示された。「相互的」、「個人的」関係間においてはいずれのカテゴリーにおいても有意な差は見られなかった。

次に「好意理由」において関係性を考慮に入れた性別の差を検証した結果を表6に示す。「相互的」、「個人的」の両関係群において、「やさしさ・思いやり」($\chi^2=4.27, p<.05; \chi^2=4.39, p<.05$)、「人柄の良さ(やさしさ以外)」($\chi^2=10.07, p<.01; \chi^2=28.75, p<.01$)の2カテゴリーで女性の使用比率が有意に高かった。さらに、「個人的」関係群においては「外見的魅力」($\chi^2=3.77, p<.10$)の使用比率に傾向差が見られ、男性の使用比率の高いことが示された。また、「変動的」関係群では「やさしさ・思いやり」

表5 好意理由・カテゴリーの関係別使用比率

好意理由カテゴリー	相互的關係		個人的關係		安定的關係		變動的關係	
	恋人・BF&GF (n=62)		片思い・親友・ 友達(n=91)		恋人・親友・ 友達(n=101)		BF&GF・ 片思い(n=52)	
類似性・合致性	33.9		22.0		30.7		19.2	
気楽さ・話しやすさ	24.2		34.1		33.7		26.9	
状況・返報	16.1		7.7		10.9		11.5	
やさしさ・思いやり	29.0		19.8		18.8		32.7 +	
人柄の良さ(やさしさ以外)	32.3		20.9		30.7 +		15.4	
楽しさ・おもしろさ	11.3		4.4		5.0		11.5	
運命的・不明	11.3		12.1		13.9		7.7	
外見的魅力	19.4		24.2		20.8		25.0	
非類似性	8.1		6.6		9.9		1.9	

数値は全て%で表示
+ p<.10;

表6 好意理由・カテゴリーの各関係性における男女別使用比率

好意理由カテゴリー	相互的關係		個人的關係		安定的關係		變動的關係	
	恋人 BF&GF		片思い 親友 友達		恋人 友達 親友		BF&GF 片思い	
	男性(n=35)	女性(n=27)	男性(n=66)	女性(n=25)	男性(n=68)	女性(n=33)	男性(n=33)	女性(n=19)
類似性 合致性	31.4	37.0	24.2	16.0	30.9	30.3	18.2	21.1
気楽さ 話しやすさ	20.0	29.6	34.8	40.0	32.4	36.4	24.2	31.6
状況 返報	11.4	22.2	7.6	8.0	7.4	18.2	12.1	10.5
やさしさ 思いやり	17.1	44.4 *	13.6	36.0 *	14.7	27.3 a	15.2	63.2 **A
人柄の良さ(やさしさ以外)	14.3	55.6 **	6.1	60.0 **	11.8	69.7 **B	3.0	36.8 **b
楽しさ おもしろさ	11.4	11.1	3.0	8.0	7.4	0.0 c	3.0	26.3 *C
運命的 不明	14.3	7.4	13.6	8.0	14.7	12.1	12.1	0.0
外見的魅力	17.1	22.2	30.3 +	8.0	22.1	18.2	33.3	10.5
非類似性	8.6	7.4	7.6	4.0	10.3	9.1	3.0	0.0

A-a, B-b, C-c間にはそれぞれ有意差あり 数値は全て%で表示
+ p<.10; *<.05; **<.01

($\chi^2=10.54, p<.01$)、「人柄の良さ(やさしさ以外)」($\chi^2=8.15, p<.01$)、及び「楽しさ・おもしろさ」($\chi^2=4.32, p<.05$)の使用比率が女性で有意に高く、「安定的」関係群では「人柄の良さ(やさしさ以外)」($\chi^2=32.38, p<.01$)の使用比率が女性で有意に高いことが示された。表6の男性、女性のそれぞれで関係間に差が見られるかの検定を行った結果から、「安定的」関係群の女性は「變動的」関係群の女性よりも「人柄の良さ(思いやり以外)」($\chi^2=4.07, p<.05$)を有意的に高く、反対に「變動的」関係群の女性は「やさしさ・思いやり」、「楽しさ・おもしろさ」($\chi^2=5.04, p<.05$; $\chi^2=6.82, p<.01$)といったカテゴリーを有意に高く使用していることが示された。

考察

本研究は回答者に「恋愛のイメージ」、及び「好意理由」を自由記述の形で求めた結果を幾つかのカテゴリーに分類し、その性差、及び関係差についての分析を行った。まず、両質問の自由記述においての言及数に男女間で有意な差が見られ、女性の方が言及数の多いことが示された。しかしながら、これだけを持って女性の方が、恋愛に対して様々なイメージを持っている、また、人に好意を抱くのに多数の理由が必要である、というような結論に達するのは早急であろう。

次に、「恋愛のイメージ」においてカテゴリー分類を試みた結果、その幾つかのカテゴリーにおいて関係差、性差があることが見出された。松井(1993a)や和田(1994)はLETS-2の得点において男女差、及び関係進行段階や関係性による差が現れることが示しているが、本研究では特定の相手に対するものではない個人の持つ「恋愛のイメージ」の自由記述においてもこのような性差、関係差が見られることが示唆された。「恋愛のイメージ」の分析結果である表1、3、4において、まず、関係性に目を向けると、「相互的」関係群では「活力&パワー・支え」や「幸せ・安らぎ」といった恋愛に対する相互

的かつポジティブなイメージが強く出ており、反対に「個人的」関係群では「あこがれ」といった恋愛を理想化するようなイメージを持っていることが示された。また、「安定的」関係群では、恋愛の大切さや信頼感などを「変動的」関係群よりも強く感じている。

さらに、関係別の男女差において、全体の男女差として現れていた女性の「付加価値」カテゴリーの使用比率の高さが、「個人的」関係群にある程度引き摺られた形で出ていたことが見てとれる。また、同関係群の女性で「相手を思うこと」といったカテゴリーの使用比率も男性より有意に高い傾向にあり、恋愛において「個人的」関係にある女性はそういった男性と比べ恋愛に対してアンビバレントなイメージを抱いていると言えるだろう。次に、「相互的」関係群における性差に目を向けると、まず女性では「成長」の使用比率が有意に高く、男性では「複雑・苦悩」の使用比率が高くなっている。これらの傾向は全体の男女比較では見られなかったものである。相互的な恋愛関係において、女性が恋愛を成長の場であるというポジティブな捉え方をしている反面、男性は恋愛を複雑で悩ませるものだと考えている。大坊(1990)や飛田(1992)で述べられているような別れ時における女性のタフさや強靭さというものは、それ以前の相互的な恋愛関係を継続しているような状態においても既に見受けられる傾向にあると言えるだろう。しかし、「相互的」関係群の女性と比べ、「個人的」関係群の女性は「成長」の使用比率が低く、また、恋愛を「複雑・苦悩」、「あこがれ」といったイメージを持ちやすいことなどから考えると全ての女性が恋愛に対してポジティブなのではなく、相互的な恋愛状況において女性はより強くなれるのではないかと考えられる。男性は相互的な恋愛状況において恋愛を複雑や苦悩だと考え、反対に女性は恋愛が相互的でない場合に恋愛を複雑や苦悩だと考えやすいという違いについてはさらに検討を要する。

「変動的」関係群においては男女差が全く見られなかったものの、「安定的」関係群において女性は男性よりも恋愛をポジティブなイメージで捉えていることが見てとれる。また、全体での男女比較で有意差のあった「活力&パワー・支え」のカテゴリーは、この「安定的」関係群における差が強く影響を及ぼしていたことがわかる。この恋愛に対するポジティブさがどこからくるものかは明確ではないが、安定的な関係にある女性はそういった男性と比べてあれこれと思慮を巡らし思い悩むというようなことをせずに肯定的に恋愛というものを捉えようとしている結果ではないだろうか。また、「変動的」関係群の男性は「安定的」関係群の男性と比べて「活力&パワー・支え」の使用頻度が高く、女性では「信頼・やさしさ」の使用頻度が「安定的」関係群において高いことは「コミットの性差」(松井, 1993b)によるものではないかと考えられる。これは、男性は不安定な関係で、女性は安定的な関係で恋愛をよりポジティブに捉えているというコミットのずれを示すと同時に、その捉え方自身にも違いがあることを示めず結果であろう。

“恋愛のスタイルは固定的ではなく、変化するものである”と Lee(1988)はその著書で述べているが、本研究は横断的な研究であるという限界を孕んではいないが、「恋愛のイメージ」が個人の恋愛状況によって変化する可能性のあることを示唆している。恋愛のスタイルとそのイメージの間にどれほどの対応が見られるのか定かではないが、そこに関連性のあることを期待しつつ今後の研究の課題としたい。

次に、「好意理由」のカテゴリー分析に関しても幾つかのカテゴリーにおいて性差、及び関係差が見られる結果となった。表 2.5、6 から見て取れるように「好意理由」は「恋愛のイメージ」と比べ、相対的に関係性に関わりなく性別による影響が強く現れていると言える。すなわち、全体的に一貫して女性は男性よりも「やさしさ・思いやり」、「人柄の良さ(やさしさ以外)」といった内面的な望ましさを好意理由として挙げている。こういった傾向は Howard, Blumstein, & Schwartz(1987)の研究にも見られるものであり、彼らはその理由を「社会化」に求めている。ここで、女性の男性に対する好意理由として「やさしさ・思いやり」が挙げられやすいという事は、やさしさや思いやりは女性を表現するためのものでは

なくなり、男性が好まれるための一つの要因になっていることがうかがえる。

次に関係別の差を見ると、「やさしさ・思いやり」は「変動的」関係、「人柄の良さ(やさしさ以外)」は「安定的」関係において使用頻度が高いことがわかる。この傾向について考えられることとしては、「変動的」関係においてはやさしさとして理由づけられていたものが、「安定的」関係になるにつれて、単にやさしさというだけでなく、信頼性や自分への誠実性などという元々やさしさから派生したであろう内面的望ましさに好意理由が移り変わっていくのではないかと推測される。そう考えるならば、やさしさや思いやりというのは、他者に好意を抱く理由としては比較的、表面的な属性として捉えられている、と言えるだろう。このような傾向は、特に女性において見られるものであり、女性は内面的な望ましさを重視するが故にこのような分化を行っているのではないかと考えられる。また、恋愛の「相互的」、「個人的」関係の間にはいずれの категорияにおいても有意な差は見られなかった。これは手法に多少の違いがあるとはいえ、Aron *et al.* (1989) の研究結果とは異なったものとなっている。さらに、本研究では、Aron *et al.* (1989) の研究には見られなかった性差が強く現れているといった相違点もある。しかしながら、他者に好意を抱くための重要度を測定した Sprecher (1998) の研究とは、相手の望ましい性格、相手のやさしさや温かさといったものが高く評価されている、それらの関係性による差が比較的小さい、また、他の幾つかの項目において性差が見られるということなど、本研究の結果と類似する点は多い。

関係を考慮に入れた男女差では、まず、「個人的」関係群において男性の方が女性よりも「外見的魅力」の使用頻度が多い傾向にあることが示された。男性が女性よりも「外見的魅力」を重視しがちであることを示した先行研究 (Buss, 1989; Feingold, 1990; Howard *et al.*, 1987; Sprecher, 1998; Sprecher, Sullivan, & Hatfield, 1994) は幾つか挙げられるが、本研究においては、そのような傾向が恋愛状況にない「個人的」関係群において現れている。これは、相手を選ぶ際には、男性は外見を重視する傾向にあるのかもしれないが、「相互的」な関係を築いた後では、それが意図的なものなのか、または道徳的規範からくるものなのかは定かではないにしても、外見的魅力から他の要因に好意理由が移り変わっていくのではないかと推測される。また、ここで一つ注目したいのが、「変動的」関係において女性が「楽しさ・おもしろさ」を高く使用していたことである。これは飛田 (1990) が述べているような、男性にとって「異性を楽しませる」ことができるか否かは親密な関係の形成や発達に大きな影響を及ぼしている、といった知見とよく一致している。「変動的」関係においてこのような傾向が強く現れたのは、男性はまだ関係が固まりきっていないような状態において、よりおもしろさや楽しさといった要素を期待されていることを示していると考えられる。

今回の研究では、恋愛のイメージや恋愛観といったものが性別や異性関係に影響を受けていることが示された。このことから、それらが反対に個人の恋愛状況や属性を反映し得るものではないかという仮説を立てることもできる。また、異性への好意の理由では、性差だけではなく異性関係による差もある程度見られたことは今後の研究にとって意味のある結果であろう。ただ、今回の研究の問題点としては、回答者の年齢が若いために、「恋愛のイメージ」や「好意理由」の category における差異が関係性によるものなのか、恋愛経験によるものか定かでないという限界を有していることが挙げられる。すなわち、片思い、友達を対象異性としている回答者は現在恋愛の相手が不在なのではなく、恋愛の経験のない回答者であったという可能性を否定しきれない。飛田 (1990) は、恋人、恋愛経験の有無によって自尊心の違いがあることを示しており、そのことから考えても、恋愛経験によって「恋愛のイメージ」や「好意理由」が影響を受けることは十分に考えられる。今後は、恋愛経験の有無、想定異性に対する恋愛感情の有無、関係への満足度などを考慮に入れた上で「恋愛のイメージ」、「好意理由」を検討すべきであろう。加えて、上述したように恋愛の類型論など既存の尺度とそれらとの関連性についても検

討する必要性があると思われる。

引用文献

- Arnold, M. E. & Thompson, B. (1996) Love style perception in relation to personality function. *Journal of Social Behavior and Personality*, **11**, 425-438.
- Aron, A., Dutton, D. G., Aron, E. N., & Iverson, A. (1989) Experiences of falling in Love. *Journal of Social and Personal Relationships*, **6**, 234-257.
- Buss, D. M. (1989) Sex differences in human mate preferences: Evolutionary hypotheses tested in 37 cultures. *Behavioral and Brain Sciences*, **12**, 1-49.
- Critelli, J. W., Myers, E. J., & Loos, V. L. (1986) The components of love: Romantic attraction and sex orientation. *Journal of Personality*, **52**, 354-370.
- 大坊郁夫 (1990) 異性間の関係崩壊についての認知的研究 日本社会心理学会第 29 回大会発表論文集 64-65.
- Davis, K. E. & Latty-Mann, J. (1987) Love styles and relationship quality: A contribution to validation. *Journal of Social and Personal Relationships*, **4**, 409-428.
- Fehr, B. & Russell, J. A. (1991) The concept of love viewed from a prototype perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 425-438.
- Feingold, A. (1990) Gender differences in effects of physical attractiveness on romantic attraction: A comparison across five research. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 981-993.
- 淵上克義・楠見幸子 (1986) 青年期の恋愛関係に関する研究() 日本心理学会第 56 大会発表論文集 651.
- Hendrick, S. S. & Hendrick, C. H. (1986) A theory and method of love. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 392-402.
- Hendrick, S. S. & Hendrick, C. H. (1995) Gender Differences and Similarities in sex and love. *Personal Relationships*, **2**, 55-65.
- Hendrick, S. S., Hendrick, C. H., & Adler, N. L. (1988) Romantic relationship: Love, satisfaction, and staying together. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 980-988.
- 飛田操 (1990) 親密な対人関係の形勢要因に対する帰属過程について 福島大学教育学部論文集 (教育心理部門), **46**, 37-47.
- 飛田操 (1992) 親密な関係の崩壊時の行動特徴について 日本心理学会第 56 回大会発表論文集 231.
- Howard, J. A., Blumstein, P., & Schwartz, P. (1987) Social or Evolutionary theories? Some observations on preferences in human mate selection. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**, 194-200.
- Jennifer, H. & Thomas, B. (1997) Dating partner preference: a function of similarity of love styles, *Journal of Social Behavior and Personality*, **12**, 595-610.
- Lee, J. A. (1977) A typology of styles of loving. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **3**, 173-182.
- Lee, J. A. (1988) Love styles. In R. J. Sternberg & M. L. Barnes (Eds.), *The Psychology of Love* (pp38-67). New Haven, CT: Yale University Press.
- Maslow, A. H. 1962 *Toward a psychology of being*. Princeton, NJ: Van Nostrand.
- 松井豊 (1990) 青年の恋愛に関する測定尺度の構成 立川短期大学紀要, **23**, 13-23.
- 松井豊 (1993a) 恋愛行動の段階と恋愛意識 心理学研究, **64**, 335-342.
- 松井豊 (1993b) 恋ごろの科学 サイエンス社.
- 松井豊・戸田弘二 (1984) 青年の恋愛行動の構造について(1) 日本心理学会第 48 回大会発表論文集, 577.
- 奥田秀宇 (1997) 人をひきつける心 対人魅力の社会心理学 サイエンス社.
- Rubin, Z. (1970) Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, **16**, 265-273.
- Sprecher, S. (1998) Insider's perspectives on reasons for attraction to a close other. *Social Psychology Quarterly*, **61**, 287-300.
- Sprecher, S., Sullivan, Q., & Hatfield, E. (1994) Mate selection preferences: Gender differences examined in a national sample. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 1074-1080.
- Sternberg, R. J. (1986) A triangular theory of love. *Psychological Review*, **93**, 119-135.
- 和田実 (1994) 大学生の性に対する態度 性行動と恋愛について 東京学芸大学 1 部門, **45**, 155-165.
- Woll S. B. (1989) Personality and relationship correlates of loving styles. *Journal of Research in Personality*, **23**, 480-505.

註

1)本論文の作成にあたりご指導いただきました、大坊郁夫教授、三浦麻子助手に深く感謝いたします。

Effects of subjects' opposite sex relationship and gender on the images about romantic love and the reasons of liking

Yuji KANEMASA, Junichi TANIGUCHI and Masanori ISHIMORI
(*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

This study aimed at examining whether the images about love and the reasons of liking obtained from open-ended questions were affected by the opposite sex relationship and gender of subjects. Subjects were 117 male and 61 female students and were asked to answer these two questions freely, "what is romantic love for you?" and "please list the reason of why you became to like the closest opposite sex person for you?". As the results of categorization, 15 categories on the images about love and 9 categories on the reasons of liking were obtained respectively. The results showed that male Ss tended to regard romantic love more negatively than female Ss in a mutual relationship and female Ss had relatively positive images toward romantic love in a stable relationship. On the question of the reasons of liking, female Ss mentioned desirable personal characteristics more than did male Ss, regardless of their relationship, and male Ss tended to refer physical appearances in a non-mutual relationship more than did female Ss. These results were discussed in terms of the differences in the concept of romantic love and process of liking with regard to the opposite sex relationship and gender.

Key words: romantic love, liking, interpersonal attraction, opposite sex relationship, gender.